霊宝館だより

題字・畠野光義師

霊宝館だより　第136号
令和3年4月3日発行
和歌山県伊都郡高野町高野山306
公益財団法人高野山文化財保存会
高野山霊宝館
電話0736―56―2029
URL http://www.reihokan.or.jp

霊宝館完成予想図　※ 詳細は6～7ページ参照

第136号　目次

大宝蔵展「高野山の名宝」……2～3
各期ごとの紹介……4～5
一〇〇年の歩み……6～7
古絵図で巡る高野山探訪（その十三）……8～9
平常展のご案内……10
令和2年度事業報告……11
令和3年度事業紹介……12

高野山霊宝館開館一〇〇周年に際し

高野山霊宝館が開館したのは大正十年（一九二一）春のことでした。

開館時の拝観料はひとり三〇銭。当時、米一升の価格が五〇銭だったことを考えると、比較的高価な料金でありました。しかし、高野山に連綿と伝わる門外不出の什宝が目の当たりにできるということで、拝観を開始した二カ月間に訪れた拝観者は二万一千人を数えました。

霊宝館に収蔵されている文化財は密教美術品としての価値が高いだけでなく、それぞれが信仰対象として多くの人々の心をとらえ続けてきたものばかりです。それらの文化財に対峙すると、数え切れないほど多くの人々の篤い信仰を感じずにはいられません。それは、一般的な美術品や骨董品とは違う「こころ」のようなものであります。

大量生産・大量消費の結果、心ない時代といわれる現代社会だからこそ、高野山に伝わる文化財がひとりでも多くの人に「こころ」を感じてもらう一助となることを願ってやみません。

高野山霊宝館長　山口　文章

毎月21日（弘法大師の日）ご来館の方にプレゼントあり！

令和３年度　事業紹介

○令和3年度展覧会情報

●高野山霊宝館開館一〇〇周年記念
大宝蔵展「高野山の名宝」
4月17日(土)～11月28日(日)
詳細ページ有り

●令和3年度冬期平常展「密教の美術」（予定）
12月4日(土)～令和4年4月10日(日)

○国庫補助事業

●重要文化財（美術工芸品）紙本著色十巻抄ほか1件 保存修理事業
平成29年度より5ヵ年計画で実施している事業の5年目が行われ、圓通寺所蔵の重要文化財　十巻抄の内第9・10巻の修理が行われます。
事業費　4，385，981円
国庫補助金　2，411，000円
県費補助金　246，000円
町費補助金　34，000円
所有者負担金1，694，981円

●重要文化財（建造物）金剛峯寺奥院経蔵 保存修理事業
令和2年年度より2ヵ年計画で実施している事業の2年目が行われ、屋根工事・檜皮葺替・塗装工事が行われます。
事業費　26，100，000円
国庫補助金14，355，000円
県費補助金　1，468，000円
町費補助金　205，000円
所有者負担金　10，072，000円

●『紡ぐプロジェクト』文化財維持・修理助成事業 国宝絹本著色 阿弥陀聖衆来迎図 保存修理事業
今年度より5ヵ年継続事業として実施されます。
事業費　11，131，216円
国庫補助金　6，678，000円
所有者負担金4，453，216円
所有者負担金の内4，450，000円が『紡ぐプロジェクト』から助成されます。

○年間パスポート

●令和3年度より年間パスポートを開始します。霊宝館受付窓口にて発行。発行日より1年間有効。
一般　3，000円
高校・大学生　1，500円
※身分証明書・学生証提示

年間パスポート

○文化財の貸出予定

●京都国立博物館
特別展「鑑真和上と戒律のあゆみ」
令和3年3月27日(土)～5月16日(日)
重要文化財　山水屏風　金剛峯寺
重要文化財　蒔絵螺鈿筥（三衣入）のうち「蒔絵螺鈿筥」「二十五条袈裟」「七条袈裟」　金剛峯寺
重要文化財　灌頂道具類のうち「箪笥（たんす）（花鳥漆絵竹編）」ほか　竜光院

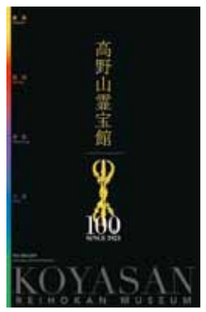
重文　箪笥

●大阪市立美術館
特別展「豊臣の美術」
令和3年4月3日(土)～5月16日(日)
国宝　紺紙金銀字一切経（中尊寺経）のうち「文殊師利法蔵陀羅尼経」　金剛峯寺
重要文化財　紺紙金字法華一品経のうち「提婆達多品第十二」　金剛峯寺

国宝　紺紙金銀字一切経（中尊寺経）

○図録

高野山霊宝館開館一〇〇周年を記念して図録を販売いたします。霊宝館に収蔵する国宝・重要文化財の大部分を掲載しています。A4変形版、二一四頁、4，500円（税込）



100周年記念図録

お問い合せ先　高野山霊宝館　TEL 0736―56―2029㈹

運　慶

国宝　八大童子立像

阿耨達童子像

指徳童子像

矜羯羅童子像

制多伽童子像

高野山霊宝館開館一〇〇周年記念大宝蔵展

「高野山の名宝」

令和3年4月17日(土)～11月28日(日)

展覧会開催に伴う臨時休館日　4月12日(月)・13日(火)・14日(水)、6月7日(月)、8月2日(月)、10月4日(月)、11月29日(月)・30日(火)

※国際博物館の日に協賛し、5月18日(火)無料拝観

高野山霊宝館は大正十年（一九二一）に開館して今年で百年を迎えます。この節目の年を迎えることを記念して高野山霊宝館開館一〇〇周年記念大宝蔵展を開催いたします。運慶作の八大童子立像、快慶作の孔雀明王像・執金剛神立像をはじめとする彫刻、三大秘宝と伝わる聾瞽指帰・諸尊仏龕・金銅三鈷杵（飛行三鈷杵）を会期中通期展示いたします。また、会期を四期に分け、高野山に伝わる国宝・重要文化財を一挙公開いたします。

運慶作

国宝　八大童子立像　金剛峯寺

快慶作

重文　孔雀明王像　金剛峯寺
重文　執金剛神立像　金剛峯寺
重文　深沙大将立像　金剛峯寺
重文　四天王立像　金剛峯寺

三大秘宝

国宝　聾瞽指帰【会期中巻替有】　金剛峯寺
国宝　諸尊仏龕　金剛峯寺
重文　金銅三鈷杵（飛行三鈷杵）　金剛峯寺

その他

重文　大日如来坐像（西塔旧在）　金剛峯寺
重文　不動明王坐像（不動堂旧在）　金剛峯寺
未指定　結縁大師像（萬日大師複製）　金剛峯寺

三大秘宝

国宝　諸尊仏龕
空海請来

国宝　聾瞽指帰（上巻）
空海筆

国宝　聾瞽指帰（下巻）
空海筆

重文　金銅三鈷杵（飛行三鈷杵）
空海所持

快　慶

重文　四天王立像のうち広目天像

重文　執金剛神立像

重文　孔雀明王像

第Ⅰ期 4月17日㈯～6月6日㈰

主な展示品

国宝 阿弥陀聖衆来迎図 有志八幡講
国宝 阿弥陀三尊像 蓮華三昧院
国宝 澤千鳥螺鈿蒔絵小唐櫃 金剛峯寺
重文 崔子玉座右銘断簡 宝亀院
重文 金剛峯寺根本縁起 金剛峯寺
重文 武田信玄像 成慶院

国宝 阿弥陀聖衆来迎図

重文 武田信玄像

国宝 澤千鳥螺鈿蒔絵小唐櫃

第Ⅱ期 6月8日㈫～8月1日㈰

主な展示品

国宝 五大力菩薩像 有志八幡講
国宝 紫紙金字金光明最勝王経 竜光院
重文 五大力菩薩像 普賢院
重文 八字文殊曼荼羅図 正智院
重文 舞楽装束類 金剛峯寺
重文 狛犬像 天野社

重文 八字文殊曼荼羅図

国宝 紫紙金字金光明最勝王経

竜王吼

無畏十力吼

金剛吼

国宝 五大力菩薩像

第Ⅲ期 8月3日㈫～10月3日㈰

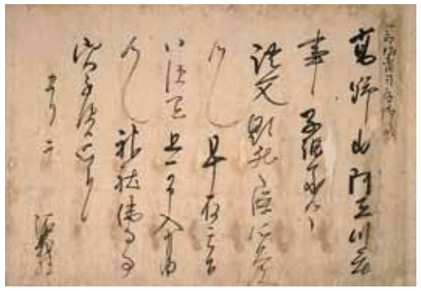
主な展示品

国宝 善女龍王像 金剛峯寺
国宝 宝簡集（源義経書状） 金剛峯寺
国宝 伝船中湧現観音像 竜光院
重文 両界曼荼羅図（血曼荼羅） 金剛峯寺
重文 八宗論大日如来像 善集院
重文 天弓愛染明王像 金剛峯寺

金剛界

胎蔵界

重文 両界曼荼羅図（血曼荼羅）


国宝 宝簡集33（源義経書状）

国宝 善女龍王像

国宝 伝船中湧現観音像

第Ⅳ期 10月5日㈫～11月28日㈰

主な展示品

国宝 仏涅槃図 金剛峯寺
国宝 続宝簡集（織田信長書状） 金剛峯寺
国宝 勤操僧正像 普門院
重文 厨子入金銅水神像 金剛峯寺
重文 地蔵菩薩像 宝寿院
重文 浅井長政夫人像 持明院

重文 浅井長政夫人像

国宝 仏涅槃図

重文 地蔵菩薩像

重文 厨子入金銅水神像

国宝 続宝簡集37（織田信長書状）

高野山霊宝館一〇〇年のあゆみ

はじめに

令和三年（二〇二一）で、高野山霊宝館は開館から一〇〇年を迎えます。昔から高野山は火災や湿害が多く、そうした災害で文化財も大きな損害を受けてきました。明治時代に全国的に文化財保護の機運が高まり、高野山の文化財の保存・公開を求める動きも活発になりました。こうした動きを受けて、大正十年（一九二一）に高野山霊宝館が開設されました。

霊宝館の開館

明治二十一年（一八八八）に高野山で五〇カ寺、一二〇〇戸を焼失させる大火が起こりました。文化財の被害も甚大で、多くの文化財が焼失しました。明治二十八年（一八九五）、三井財閥の大番頭だった益田孝（鈍翁）が、入手した「弘法大師座右銘断簡」を展覧しました。その席に政財界の数寄者を集め、「大師会」を創設し、高野山の文化財の保存と公開を提唱しました。

こうした状況を受けて、高野山の文化財を管理する宝物館設立の計画が立ちあがります。明治四十三年（一九一〇）に鉄道王と呼ばれた根津嘉一郎が、宝物館設立に賛同すると、同年中には宝物館建設に関する評議委員会が発足し、建設が決定しました。同四十五年（一九一二）には、「高野山宝物館建設趣意書」がつくられ、大正二年（一九一三）には、三十三名の政財界人が発起人となり「高野山に宝物館を建設し、金剛峯寺、及び一山各寺院所蔵の宝物を収容し、一般余人の拝観に供し、且永久保存を謀る」という趣旨のもと、「高野山宝物保存会」が設立されました。この会の発起人には、渋沢栄一やのちの総理大臣高橋是清、日本のビール王とよばれた馬越恭平、三井財閥の総帥団琢磨、前述の根津嘉一郎など錚々たる面々が名を連ねました。会の臨時事務局の主任に金剛峯寺参事の佐伯宥純が就任し、建設資金勧募のために奔走しましたが、第一次世界大戦などの影響により、計画は困難になりました。それでも、大正四年（一九一五）の宗祖壱千百年御遠忌記念事業では、宝物館建設が掲げられ、建設計画は進められました。

大正五年（一九一六）、高野山にたびたび調査に訪れていた歴史学者の黒板勝美を顧問に、神社建築の専門家の荻野仲三郎を設計監修に、日光山宝物館を設計した大江新太郎を設計者に選任しました。同七年（一九一八）七月には、建設予定地を伽藍に近い勧学院の前に決定し、八月には地鎮祭が行われ、宝物館建設が始まりました。当初はすべて鉄筋コンクリートで建設される予定でしたが、費用の問題から収蔵庫である小宝蔵以外は木造で建設されました。同八年（一九一九）一月には、宝物館を「霊宝館」、本殿を「紫雲殿」、北西隅の部屋を「放光閣」と命名しました。同年八月二十四日には上棟式が行われ、翌九年（一九二〇）九月三十日に完成、さらに翌十年（一九二一）三月一日の仮開館式を経て、五月十五日に開館式を挙行しました。

霊宝館開館式集合写真

完成した霊宝館は周囲の寺院との調和を考え、寺院風の外観となっています。そのモデルは京都府宇治市の平等院鳳凰堂で、本来はその形を模して紫雲殿を中心に両翼を形成した回廊式にする計画でしたが（表紙参照）、費用面の問題があり中止になり、紫雲殿を中心に西側のみの建物（現在の本館）となりました。木造建築ですが火災対策として木骨に漆喰が塗りこめられた土蔵造で建てられました。漆喰が塗り込められない箇所は銅板で包み込まれ、耐火の役割を果たしました。土蔵造は湿気にも効果があり、耐湿効果を発揮しました。また、この時に建てられた収蔵庫（小宝蔵）は鉄筋コンクリート造で、耐震耐火の役割を果たしました。その様式は奈良の正倉院と同じく校倉造で、こちらも周囲の寺院との調和がはかられました。

霊宝館の一〇〇年

開館した霊宝館には帝室博物館（現在の国立博物館）から返却された国宝なども含めて、山内の貴重な文化財が収蔵されました。開館してすぐの大正十年（一九二一）七月二十日、霊宝館の月並法会が毎月八日と決定されます。これは、霊宝館が単なる博物館ではなく、仏さまの拝観所であるということです。当時の御法楽は般若心経、立義分各三巻、不動・愛染各七返、大師・明神・覚海・毘張・満山護法善神各七返が行われました。現在は毎月十九日に行われています。

開館当初より多くの人々の拝観がありましたが、大正十二年（一九二三）に秩父宮殿下、同十五年（一九二六）にスウェーデン皇太子殿下、同妃殿下など貴賓の来館もありました。この二例の時は、それぞれ霊宝館の敷地内に記念植樹が行われました。植えられた木は、現在も大きく成長した姿で残っており、霊宝館の長い歴史を感じさせてくれます。

秩父宮殿下植樹

スウェーデン皇太子殿下植樹

昭和元年（一九二六）十二月二十六日には、伽藍の金堂が炎上、秘仏であった本尊をはじめ諸尊像が焼失します。このとき快慶作の孔雀明王像や金字一切経（荒川経、ともに重文）は難を逃れ、霊宝館に収蔵されました。

昭和三十二年（一九五七）には、高野山の文化財を統括する組織として、財団法人高野山文化財保存会が設立しました。霊宝館はこの法人の管轄下に置かれ、現在まで続いています。翌三十三年（一九五八）には高野山文化財保存会と毎日新聞社を中心に五ヶ年にわたる大規模な文化財調査が行われ、多くのことが発見されました。その成果を紹介する形で、同三十八年（一九六三）大阪高島屋で特別展が開催されました。

昭和五十七年（一九八二）には機関誌『霊宝館だより』が創刊され、また同六十年（一九八五）には「霊宝館友の会」が発足し、高野山の文化財の魅力をより広く発信するようになりました。

収蔵品の増加に伴い、収蔵庫の新設も行われました。昭和三十六年（一九六一）に大宝蔵、同五十九年（一九八四）に新収蔵庫（新館）、平成十五年（二〇〇三）に平成大宝蔵が新設されました。これらの収蔵庫には現在、国宝二一件、重要文化財一四八件を含む約八〇，〇〇〇点の文化財が収蔵されています。

このように多くの文化財を収蔵する霊宝館ですが、平成十年（一九九八）に本館が、現存最古の木造博物館建築物として小宝蔵とともに、国の登録有形文化財となりました。文化財を護る建物である霊宝館もまた、文化財として高野山の歴史を彩ることになったのです。

霊宝館は今年で開館から一〇〇年を迎えます。今後もこれらの文化財を安全に管理するとともに、展覧会などを通じて、文化財の魅力を皆さまに発信していきたいと思います。

（研谷　昌志）

現在の霊宝館。右手は秩父宮殿下植樹の高野槙

※「秩父宮殿下植樹」並びに「スウェーデン皇太子殿下植樹」の二枚の写真は、高野山出版社発刊『高野山時報』（三〇二号、四二二号）より転載させていただきました。

「古絵図で巡る高野山探訪」（その十三）

高野山霊宝館

大正十年（一九二一）高野山霊宝館は開館し、今年令和三年（二〇二一）で開館一〇〇年を迎えます。本館の建物群は開館当初の建物で、平成十年（一九九八）に国登録有形文化財に指定され、現在も展示棟として使用しています（写真1）。本稿では、開館以前の敷地の様子を見てみましょう。

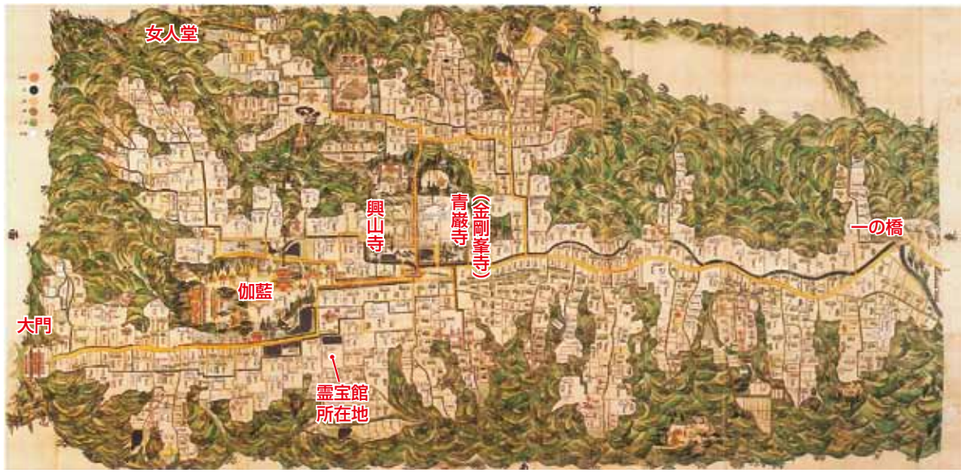


図1 『高野山壇上寺家絵図』（宝永3年〈1706〉 金剛峯寺蔵）

写真1 高野山霊宝館本館（部分）

高野山霊宝館の建設

高野山霊宝館が建設される一時代前の明治時代は、西洋文化の流入を機に、日本の文化財を保護していこうという機運が国内で高まり、東京帝室博物館（現東京国立博物館）、奈良帝室博物館、（現奈良国立博物館）、京都帝室博物館（現京都国立博物館）といった博物館が国家事業として建設されました。

その後、文化財保護思想は一般にも広がり、大正期には高野山でも弘法大師空海ゆかりの文化財、また各子院で護り続けてきた文化財を一元的に管理、保存、公開するための施設として高野山霊宝館の建設計画が持ち上がりました。建設にあたり、朝日新聞創始者の上野理一、日本資本主義の父といわれた渋沢栄一、のちに第二〇代内閣総理大臣となった高橋是清、「日本のビール王」といわれた馬越恭平らといった当時の政財界の錚々たる面々が発起人となりました。

建設前の敷地の様子

建設時の資料には、建設地は聖地伽藍に近い立地となり、發光院、引攝院など、いくつかの子院が移転されたことが記されています。

また、それ以前の『高野山壇上寺家絵図』（宝永三年〈一七〇六〉 金剛峯寺蔵 図1・2）を見ると、高野山霊宝館の敷地には、大楽院、南院、真如院、龍生院、西室院、増福院などいくつかの子院が見られ、連綿と子院が営まれてきた場所であることがわかります。

収蔵庫などの建設に伴う発掘調査

高野山内は、ほぼ全域が埋蔵文化財包蔵地となっており、「金剛峯寺遺跡」に指定されています。そのため、建物を建設、また地面を掘削する工事を行う際には、事前に発掘調査などを行わなければなりません。高野山霊宝館の敷地も遺跡内にあるため、建物建設や工事の際には発掘調査が行われました。昭和五十七年（一九八二）には新館（新収蔵庫）の建設、昭和五十八年（一九八三）には駐車場の建設、平成十五年（二〇

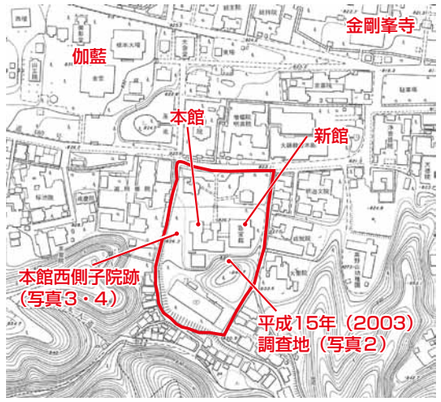


図3 高野山霊宝館位置図 ※ 赤線部分が高野山霊宝館敷地

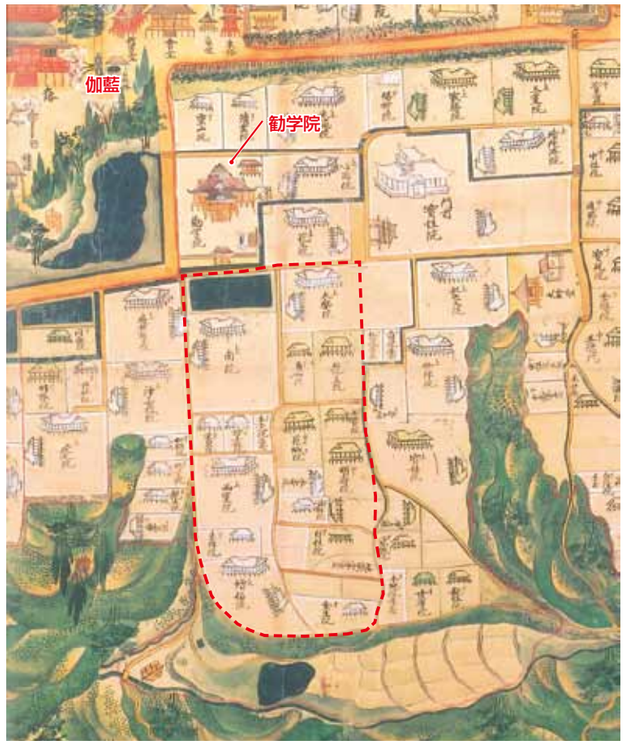


図2 『高野山壇上寺家絵図』（部分）※ 破線部分が現在の高野山霊宝館敷地

写真2 高野山霊宝館平成大宝蔵建設に伴う発掘調査区（部分・平成15年〈2003〉調査）

写真3 高野山霊宝館本館の西側にある子院跡テラスと石垣

写真4 子院や建物の境界を区分する石垣

〇三）には国宝・重要文化財を収める平成大宝蔵の建設に先立ち調査が行われました（写真2）。

発掘調査では、古絵図に描かれた子院を構成する建物、石垣、井戸、溝、池、地鎮跡など、多種多様な遺構が検出されました。また、遺構に伴って、甕、壺、皿、硯、尿瓶、煙管などといった生活雑器や、仏具や一石五輪塔などの宗教遺物も出土しました。これらの遺構や遺物は、鎌倉時代から江戸時代にかけてのもので、大楽院、南院、真如院、龍生院、西室院、増福院、發光院、引攝院など、またそれ以前にあった子院の生活を彷彿とさせる興味深いものばかりでした。

今も地下に眠る子院跡

高野山霊宝館の敷地に多数の寺院があったことは前述しましたが、本館西側にある空閑地の地表面に目をやると、子院や建物の敷地の境界を区分するものと考えられる高低差のあるテラス（写真3）が二面、またその境界を区分する石垣（写真4）が観察でき、今も子院跡の遺構が残されていることがわかります（一般公開していません）。

このような歴史ある土地に建設された高野山霊宝館での展覧会と併せて、開館当時の建物もご覧いただき、一〇〇年前に思いを馳せながらのご拝観をお楽しみください。

（鳥羽正剛）

令和二年度冬期平常展

「密教の美術―経典と仏さま」開催中

【会期】
開催中～令和3年4月11日(日)
会期中無休

私たちが仏さまを思い浮かべる時、おそらく仏像や仏画などを思い浮かべると思います。多くの仏像や仏画は元々経典に記された内容から姿形を造形したものですが、経典を思い浮かべる人はあまりいないと思います。そこで、今回の展覧会では、仏像、仏画とそれに関わる経典を展示、紹介します。

主な展示品

■彫刻
未指定　不動明王坐像及び二童子立像　金剛峯寺

■絵画
重文　覚禅鈔　釈迦文院
未指定　両界曼荼羅図　金剛峯寺

■書跡
国宝　紺紙金銀字一切経（中尊寺経）　金剛峯寺
国宝　不空羂索神変真言経　三宝院
重文　高麗版一切経　金剛峯寺
重文　大毘盧遮那経巻第一　竜光院
重文　細字金光明最勝王経　金剛峯寺

不動明王坐像及び二童子立像　室町時代　金剛峯寺
金剛峯寺護摩堂の本尊であった。
不動明王は像内に文明七年（1475）の墨書銘を有する。

国宝　紺紙金銀字一切経（中尊寺経）　平安時代　金剛峯寺
紺紙に金字と銀字で一行ごとに交互に写経されている。
巻頭には様々な見返し絵が描かれる。この見返し絵は昼寝の場面。

金剛界

胎蔵界

両界曼荼羅図　室町時代　金剛峯寺
金剛界は『金剛頂経』、胎蔵界は『大日経』にもとづいて、仏の世界観を描いている。

令和２年度　事業報告

◎国庫補助事業

●重要文化財（美術工芸品）紙本著色十巻抄ほか1件保存修理事業

平成29年度より5ヵ年計画で実施している事業の4年目が行われ、圓通寺所蔵の重要文化財十巻抄の内　第6・7・8巻の修理が行われました。

事業費　5，086，755円
国庫補助金　3，305，000円
県費補助金　286，000円
町費補助金　40，000円
所有者負担金1，455，755円

●重要文化財（建造物）金剛峯寺奥院経蔵保存修理事業

令和2年度より2ヵ年計画で実施している事業の1年目が行われ檜皮の調達・一部塗装の剥落止めが行われました。

事業費　18，000，000円
国庫補助金　11，700，000円
県費補助金　787，000円
町費補助金　110，000円
所有者負担金　5，403，000円

●国宝（建造物）金剛峯寺不動堂防災施設設備事業

令和元年度より実施してきた不動堂の防災設備ドレンチャーの修理が完了しました。

事業費　4，198，238円
国庫補助金　3，148，000円
県費補助金　220，000円
町費補助金　27，000円
所有者負担金　803，238円

◎新指定品紹介

●平成31年に高野山圓通寺で発見された木製五輪塔が、国の登録有形民俗文化財として令和3年1月15日に文部科学大臣に答申されました。名称は「高野山奉納小型木製五輪塔及び関連資料」で、五輪塔1万2156点、関連資料156点の合計1万2312点となります。今まで不明な点の多かった高野山の江戸時代後期の民俗史や高野聖の実態に迫る貴重な資料であり、和歌山県初の登録有形民俗文化財となりました。

小型木製五輪塔

◎新規収蔵品報告

●令和2年9月に金剛峯寺囲炉裏（いろりのま）間の本尊であった愛染明王像が収蔵されました。

愛染明王像　金剛峯寺

愛染明王像

●令和2年11月23日から11月30日まで伽藍金堂にて行われた大元大法勤修に伴い製作され、法会終了後霊宝館に収蔵されました。

釈迦曼荼羅図　金剛峯寺
大元帥明王像　金剛峯寺

大元帥明王像

釈迦曼荼羅図

◎友の会会員募集

・会員証提示で会員本人様のみ霊宝館と金堂・大塔の拝観無料
・霊宝館発行の機関誌「霊宝館だより」送付
・霊宝館発行の図録進呈

〈年会費〉
一般会員（個人）　3，000円
賛助会員（法人）　30，000円

皆様のご入会をお待ちしております。